

基本テーマ	生きがいの場を持つ	サブテーマ	ふるさとの歴史を学び・創る
岩手の残したい景観（3 / 4）			
<p>■都市・街並みの残したい景観</p>			
			
<p>県庁前から見るお堀の景観</p>	<p>盛岡市内丸の盛岡市役所前から見る中央通りの景観</p>	<p>盛岡市紺屋町、上の橋袂から見る上の橋の擬宝珠の景観</p>	<p>盛岡市紺屋町森九商店裏から見る中津川堤防道路の景観</p>
			
<p>盛岡市内丸の岩手県民会館脇から見る中央分離帯のイチョウの景観</p>	<p>盛岡市岩山展望台から見る盛岡の街の景観</p>	<p>盛岡市手代森（通称）アップルロードから見る北上川流域の景観</p>	<p>盛岡市役所裏の中津川沿いの遊歩道から見る中津川とござ丸・ふかくさの景観</p>
			
<p>盛岡市上米内字土室 国道455号から見る紫波三山と盛岡市街の景観</p>	<p>盛岡市上米内字土室 国道455号から見る紫波三山と盛岡市街の景観</p>	<p>東和町土沢地内の舘山公園から見る土沢の街並の景観</p>	<p>東和町土沢地内の舘山公園から見る土沢の街並の景観</p>
			
<p>一関市萩荘「佐藤坂」から見る栗駒山（須川岳）と一関市街の景観</p>	<p>一関市萩荘萩荘郵便局付近から見る花ミズキ並木の景観</p>	<p>一関市釣山公園から見る公園の紅葉の小路の景観</p>	<p>一関市釣山公園展望台東屋から見る磐井川と一関市街、東稲山の景観</p>

基本テーマ	生きがいの場を持つ	サブテーマ	ふるさとの歴史を学び・創る
-------	-----------	-------	---------------

岩手の残したい景観（4 / 4）

■都市・街並みの残したい景観



三島山から見る街と  
室根山の景観



岩手銀行千厩支店裏側  
より千厩町役場を見る  
から見る横屋酒造の酒  
蔵の景観



遠野市松崎町高清水  
展望台から見る遠野  
盆地の景観



久慈市小久慈町滝ダム  
か見る久慈市の景観

■建築物の残したい景観



矢巾駅西側（駅から  
徒歩5分程）から見る  
徳田倉庫の景観



湯田町 国道107号  
錦秋湖の近くから見  
るJR北上線の赤い鉄  
橋の景観



沢内村猿橋25地割  
七内川から見る今も  
使っている茅葺き民  
家の景観



水沢市黒石町の国道34  
3号正法寺上ノ橋から見  
る奥の正法寺の景観



沢内村保存家屋 清  
吉稲荷の古民家から  
見る稲荷神社の景観



水沢市真城字堂田の  
県道田原折居線から見  
る水栗林の環濠屋敷の  
景観



水沢市大町の大町川沿い  
から見るケヤキ並木と長  
光寺橋の景観



沢内村保存家屋  
清吉稲荷から見る  
古民家の景観



胆沢町若柳字大立目  
トレーニング農場から  
見るセミナーハウス  
の景観



宮守村道の駅から見る  
めがね橋の景観

基本テーマ

生きがいの場を持つ

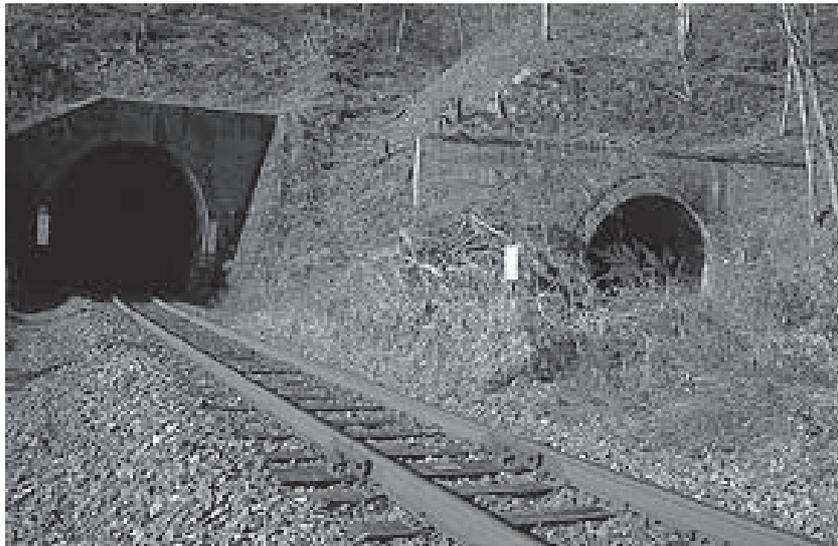
サブテーマ

文学ロマンに触れる

### 宮沢賢治ゆかりの風景（1 / 2）

#### ■「銀河鉄道の夜」のモデルとなった岩手軽便鉄道

- ・ JR 釜石線の花巻～遠野間に残る岩手軽便鉄道の土木遺構とそれに沿った風景。
- ・ 難工事を克服した鉄道建設や産業振興など、岩手の近代化に役割を果たした風景と、宮沢賢治も文学の世界の風景が重なる。



新旧の鱒沢トンネル（資料出典；無明舎出版 HP）



基本テーマ	生きがいの場を持つ	サブテーマ	文学ロマンに触れる
<b>宮沢賢治ゆかりの風景（2 / 2）</b>			
○宮沢賢治ゆかりの鉄道遺構の土木遺産認定（宮守村 HP より）			
<b>見つめ直そう郷土のたから</b>			
アーチ形状の美しさと、宮沢賢治の原風景を思わせる景観が評価され、宮守川橋梁と達曽部川橋梁が、選奨土木遺産に認定されました。地域で守ってきたこの橋が、今、すべての人々の宝となりました。			
<b>宮守川橋梁</b>			
	<p>軽便鉄道で最後に開通した岩根橋－柏木平間の中にある宮守駅近くの宮守川には「宮守川橋梁（通称「めがね橋」）」があります。脇には石造りの橋脚が3本軽便鉄道時代の名残として残っています。</p>		<p>軽便鉄道当時の宮守川橋梁</p>
<p>国道283号と宮守川を横断し通称「めがね橋」と呼ばれ親しまれてきたこの橋は、正式には「宮守川橋梁」といいます。昭和10年8月9日に完成し、改修を行いながら現在も利用されています。長さは107.3m、川面からの高さは17.8m、鉄道用としては珍しいバランストアーチ橋で、20mの間隔で5連のアーチが並んでいます。</p> <p>この橋の手前があるのが、大正4年11月に作られた岩手軽便鉄道の鉄橋の一部です。石灰質砂岩の練り石を組んで作られたこの橋は、上部に鋼鉄製の橋げたが渡され、そこを蒸気機関車が走っていたそうです。</p>			
<b>達曽部川橋梁</b>			
	<p>猿ヶ石川と達曽部川が合流する場所に架かる「達曽部川橋梁（通称「岩根橋」）」。賢治の銀河鉄道の夜の原風景を思わせます。</p>		<p>改修前の達曽部川橋梁。現在のアーチ橋はこの橋脚を包み込んで作られました。</p>
<p>岩手軽便鉄道開設の中で一番の難関とされ、最後に工事が完了した岩根橋－柏木平間（9.5Km）。それを象徴するのが猿ヶ石川と達曽部川の合流地点に架かる達曽部川橋梁です。</p> <p>昔はこの辺りを大厚楽（だいあつらく）と呼び、早池峰山地最古の蛇紋岩塊の断崖と絶壁が連なり、川は白波の渦巻くところでした。</p> <p>現在の達曽部川橋梁は、昭和18年9月に完成し、長さが98.5m、川面からの高さは17mあり、コンクリートアーチ橋で6連のアーチが並んでいます。JRの資料によると、この鉄橋は軽便鉄道時代に建設された鋼板桁橋の橋脚をそのまま芯として包み込んでいるそうです。</p> <p>花巻市出身の詩人宮沢賢治と軽便鉄道とのつながりは、賢治の詩から読みとることができます。当時、宮沢賢治は岩根橋に度々訪れたということも分かっており、童話「銀河鉄道の夜」は、その中から生まれた作品ともいわれ、「達曽部川橋梁」はその原風景を思わせます。</p> <p style="text-align: right;">（中略）</p>			

基本テーマ	生きがいの場を持つ	サブテーマ	文学ロマンに触れる
-------	-----------	-------	-----------

### 遠野物語（1 / 3）

■わが国の民俗学の先駆者である柳田国男が、民間伝承の宝庫として、遠野周辺を調査し、まとめた「遠野物語」は、わが国民俗学の門出を飾る記念碑と評価されている。



世斧ふるさと村



カッパ淵。民話に登場するカッパが住むと言われるそこが見えない淵。



たかむろ水光園。浄水場を兼ねた入浴・レジャーを併設する施設



オシラサマ。養蚕や家の守護神としてまつられる民間信仰の対象

### 「遠野物語」によるまちおこしに関する報告

#### 『遠野物語』をまちおこしのテーマに市民と行政が連携し文化事業を

遠野市総務部企画調整課主事 大里政純

#### 地域に残る資源を活用

東京から東北新幹線で約三時間、JR釜石線に乗り換えてのどかに田んぼと山並みを眺めながら約一時間。昭和五十六年の東北新幹線の開通は、それまでの国内観光のベクトルに大きな変化をもたらした。加えて、折からの「ふるさと志向」を背景に、東北の新たな観光時代の幕開けとなった。そのころから遠野を訪れる観光客が年々増えてきた。

資料；月間・地域づくり、三陸夢紀行、いわて自然探検（岩手県商工労働観光部観光課）

基本テーマ	生きがいの場を持つ	サブテーマ	文学ロマンに触れる
<b>遠野物語（２／３）</b>			
<p>遠野市はかつて、宿場町・城下町として栄えた時代があったが、時代の変遷とともに、まちは次第に活力を失っていった。人口も減少の一途をたどり、産業構造も弱く、過疎化の進行に歯止めはかからない。</p>			
<p>しかし、このような逆境のなかで、遠野には地域を甦らせる貴重な宝が残っていた。それは、脈々と語り継がれてきた民話と、それを大きく世の中に知らしめてくれた柳田国男の『遠野物語』であった。民話と『遠野物語』という地域資源にこだわったまちづくりが始まり、いつの間にか「民話のふるさと遠野」という言葉が定着していったのである。</p>			
<p><b>トオノピアプランの推進</b></p>			
<p>このまちづくりを推進するうえで、遠野市総合計画、いわゆるトオノピアプランが大きな役割を果たした。総合開発計画はどこの市町村でも策定されているが、本市では昭和五十二年に策定し、当時ではめずらしくトオノピアプランと命名した。「大自然に息吹く永遠の田園都市」を目指し、生産加工都市、健康文化都市および博物公園都市の三つを将来の都市像に掲げた。そのひとつ、博物公園都市構想では、市内全域の公園化を計画、代々の市長のもと数々の事業を展開してきたが、常に根底には、遠野を永遠のユートピアへの思いが流れていたためである。近年、その努力が徐々に花開きつつある。</p>			
<p><b>民話が生きるまち</b></p>			
<p>民話を生かしたまちづくりとして、手始めに昔からある千葉家曲り家、続石、五百羅漢、カップ淵など、遠野の暮らしや民話の世界をイメージ・彷彿させる資源の掘り起こしとPRを行った。</p>			
<p>ソフト事業では、今年で二十二回目の公演となる遠野に春を呼ぶ市民の舞台「遠野物語ファンタジー」の継続開催や、十四回目の冬のイベントとして定着した遠野昔話まつり、平成四年度に開催した世界民話博。また、『遠野物語』の注釈研究を重ねている遠野常民大学の活動の一環としての「遠野物語ゼミナール」の開催。そして、平成七年には、遠野物語を中心とした歴史民俗の調査研究を進める「遠野物語研究所」の開設と、市民と行政の文化パワーが次々と発揮された。</p>			
<p>ハード事業では、昭和五十五年、わが国初の民俗館を併設した遠野市立博物館を整備したのを皮切りに、昔話村、伝承園を整備していった。また、ふるさと創生一億円事業では、遠野駅から博物館までの通りに、遠野はもちろん国内や世界の民話や童話の主人公の彫刻を配置した民話の道を整備した。そして七年四月に、消えゆく南部曲り家を移築復元した「遠野ふるさと村」がオープンし、人気を博している。</p>			
<p>このほか駅前交番がカップの顔に変身し、郵便ポストにはカップが腰をおろしているなど、ほほえましい試みも相次いでいる。</p>			
<p>このようななか、平成七年七月七日に、JR東日本が遠野駅を改装し、B&amp;B方式のホテル、フォルクローロ（民話）遠野をオープンさせ、首都圏での遠野のPRに大きく貢献していただいた。</p>			
<p><b>二十一世紀に残る民話の里づくり</b></p>			
<p>全国津々浦々、各市町村にはそれぞれの地域資源がある。遠野はいま、民話という無形の資源に加え、昔からある南部曲り家と馬、木材という有形の三つの地域資源にこだわりながらまちづくりを進めている。それは、遠野ふるさと村であり、遠野馬の里であり、遠野地域木材総合供給モデル基地の整備であり、二十一世紀に花開く内発型の産業おこしである。</p>			

資料；月間・地域づくり

基本テーマ	生きがいの場を持つ	サブテーマ	文学ロマンに触れる
-------	-----------	-------	-----------

### 遠野物語（3 / 3）

とはいえ、社会情勢の変化に対応した施策も必要不可欠である。昨年にはインターネットホームページを開設し、世界へ向けて情報の発信を行いつつ、地域内の情報化のためのCATVの整備も検討している。また、かつて市で賑わった中心市街地の再生を目指し、下一日市地区土地区画整備事業にも着手し、文化の香る街並みがお目見えする日も近い。

加えて近年、グリーンツーリズムにも取り組んでいる。来年には新たに二軒の農家民宿ができる動きもあり、遠野の観光は「見る」観光から「体験する」観光に脱皮しつつある。

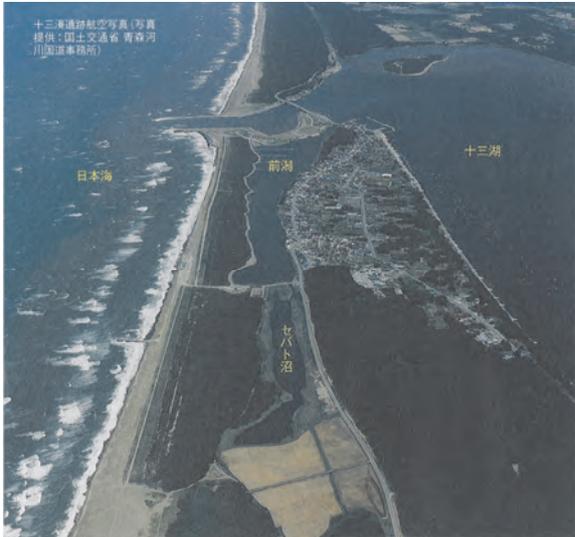
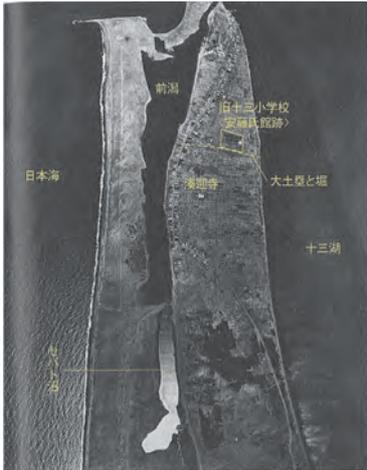
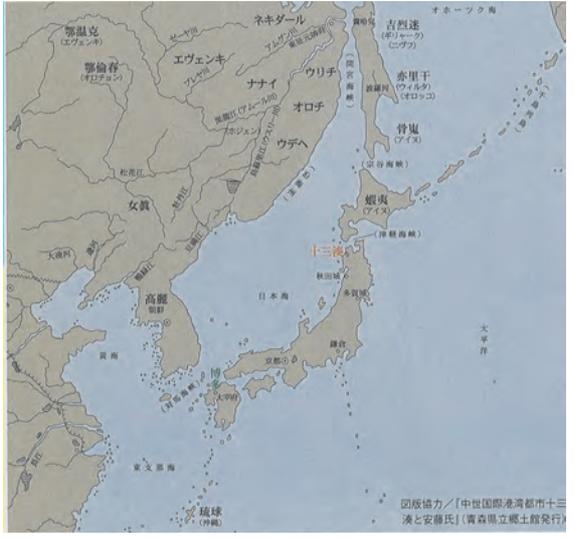
日本列島改造や高度経済成長、そしてバブル経済と、この四半世紀ぐらいの間に、日本は急速に大きな変化を遂げてきたが、このスピードに追いつくことができず、一歩も二歩も遅れをとりながら歩んできた本市にとって、バブル経済崩壊の影響もほとんどなかった。逆にその国民的反省として、物の豊かさよりも心の豊かさを求める傾向が強まったことは、本市にとって追い風が吹き始めている感がする。

これはまさに、イソップ童話のウサギとカメの競争のようなものであり、一周遅れのトップランナーである。

せつかくの地域資源であり宝である民話と『遠野物語』である。ますます大切に、さらにこだわりを持ち保存し活用することにより、全国の遠野ファンに、もしかしたらいまでも本当に山奥にはマヨイガが存在し、カップや山姥、雪女たちが活躍し続けているのではないかというロマンいっぱいの遠野を、いつまでも愛し続けていただけるようなまちでありたいと考えている。



資料；月間・地域づくり、三陸夢紀行（岩手県商工労働観光部観光課）

基本テーマ	交易の歴史を知る	サブテーマ	歴史街道を行く
<b>中世の北方交易遺構 青森県十三湊（1 / 3）</b>			
<p>■青森県北津軽郡市浦村。「浅い真珠貝を水に浮かべたような」と太宰治が「津軽」の中でたとえた十三湖のほとりにある村。</p> <p>■1991年に始まる国立民族博物館と県市の教育委員会による発掘調査によって、中世に北方交易の拠点であったことが解明されつつある。</p> <p>■十三湊は、中世海運の拠点港、三津七湊（さんしんすちそう）の一つとして、古くから知られていた。約500年前、謎の海領主・安藤氏が支配する、日本を代表する港湾都市として栄えていた。</p> <p>■十三湊と京都との距離感で北方を見ると、樺太や千島列島南部、沿海州の各地が視野に入る。さらに九州との距離感で見ると、北東アジアの各地が視野に入る。</p> <p>■しかし、興国年間（1340～46）の津波によって壊滅し、何も残っていないと信じられていたが、日本海と十三湖に挟まれた砂州の上に完全な形で残されていた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div data-bbox="225 1279 708 1973" style="width: 45%;">  <p>中世の約200トンの日中交易船（模型）。 （国立歴史民俗博物館蔵）</p> </div> <div data-bbox="874 412 1449 949" style="width: 45%;">  <p>十三湊遺跡航空写真（写真提供：国土交通省 青森河川国道事務所）</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div data-bbox="874 972 1241 1442" style="width: 45%;">  </div> <div data-bbox="1251 972 1474 1442" style="width: 45%;">  <p>十三湊遺跡想定復原図</p> <p>「日本の中世1 中世のかたち」(中央公論新社刊)より転載</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div data-bbox="874 1451 1449 1989" style="width: 45%;">  <p>図版協力「中世国際港湾都市十三湊と安藤氏」(青森県立郷土館発行)</p> </div> </div>			

資料；トランヴェール（JR 東日本発行、2004. 5）、国立民族博物館 HP、青森県 HP

基本テーマ	交易の歴史を知る	サブテーマ	歴史街道を行く
-------	----------	-------	---------

## 中世の北方交易遺構 青森県十三湊（2 / 3）

### ■安藤氏と北方の関わり

安藤氏は他の氏族と異なり、自らを蝦夷につながる系譜を残しています。現在、学界では大きく四つに分類されています。しかし安藤氏の本質を探る上では、共通して三つのキーワードが指摘されています。まず第一に「安日」、第二に「高丸」、そして第三が「安倍氏」です。「安日」は中世に鬼王と呼ばれ、蝦夷の祖先として意識されていました。「高丸」は悪路王とも呼ばれ、坂上田村麻呂に対する抵抗伝説上の人物で、安藤氏の祖先として位置づけられるようになったのが、鎌倉時代とされています。「安倍氏」とのつながりについては、北奥の支配者として、北方・蝦夷支配のよりどころとするためであると考えられています。

（中略）

### ■「日の本將軍」号と日本海交易

南北朝期、安藤氏の惣領を継承した宗季は建武政権（後醍醐天皇）方につくことになりました。その一方で、安藤氏が代々継承している蝦夷沙汰と地頭職を確保のため、奔走しました。しかし、南部氏による津軽支配が進展すると、安藤氏と南部氏の対立が顕著となって来るのです。

政権が室町幕府にうつり、將軍足利義満の時代に入ると、秋田安藤盛季の弟鹿季が新領主湊家を創設、正式に津軽の下国家と秋田の上国家が誕生しました。この頃から津軽下国安藤氏を、「日の本將軍」と呼称するようになります。

安藤氏が「日の本將軍」として活躍したとされる事柄に、越前国羽賀寺再建があげられます。再建に関与したのは安藤康季です。当時の安藤氏は、十三湊を拠点に蝦夷地の産物と上方の産物を交易する、日本海交易によって大きな富を得ていたと考えられています。日本海交易では、安藤氏の十三湊を介して、鮭・昆布・鷺羽やヒグマ・ラッコ・アザラシなどの皮といった、奥羽地方で産出されないものも交易されていました。また、珠洲や越前の陶器や大陸の舶載陶磁器が十三湊へ流入したルートであることも推測されています。こうした安藤氏の財政力が、羽賀寺再建を可能にしたのです。

（後略）



出土品の一部



左：安藤氏館跡と推定される大土塁北側  
右：港湾施設跡の木杭ともやい綱



資料；トランヴェール（JR 東日本発行、2004. 5）、国立民族博物館 HP、青森県 HP

基本テーマ	交易の歴史を知る	サブテーマ	歴史街道を行く
-------	----------	-------	---------

中世の北方交易遺構 青森県十三湊（2 / 3）

■安藤氏ゆかりの遺跡



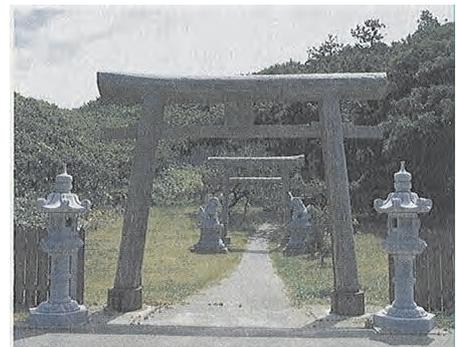
安藤康季が再興した羽賀寺本堂（国指定重要文化財）。本尊十一面観音像を納める厨子も康季が寄進した（小浜市教育委員会写真提供）



山王坊跡日吉神社  
かつて、安藤氏の宗教施設が建てられていた



福島城跡 平安時代の10世紀後半～11世紀に建てられ、安藤氏も利用した



浜の明神跡  
現在の湊神社は、中世の浜の明神跡と伝えられている



唐川城跡 平安時代の10世紀後半～11世紀環濠集落で、安藤氏も再利用した



春日内観音堂  
中世に所在した龍興寺と春品寺の跡と伝えられている

資料；トランヴェール（JR 東日本発行、2004. 5）、国立民族博物館 HP、青森県 HP

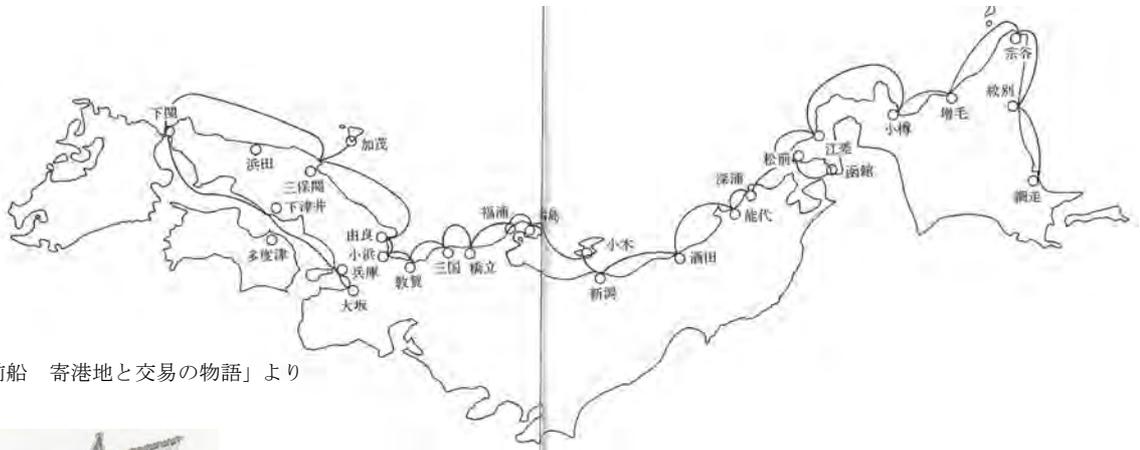
## 北前船の寄港地と文物（1 / 2）

## ■北前船とは

江戸中期から明治にかけて、蝦夷と大阪を結ぶ物資輸送のルートとして、物資とともに文化を伝える役割を果たした。

もともとは、1638年に、加賀藩前田利常が、大阪までの水路を開発したことに始まり、その34年後に、河村瑞賢が東北及び蝦夷と江戸まで結ぶ西回り航路を開発した。

東周り航路もあったが、江戸までの距離は短いものの、黒潮と親潮の早い潮の流れに流されてしまう危険を伴うため、あまり利用されなかった。



「北前船 寄港地と交易の物語」より



明治30年代の北前船の係舟

### おけさのルーツを求めて 東廻り航路と大阪、江戸間 定期航路による流布

（西廻り船＝北前船）  
下関から日本海側の各港に停泊しつつ青森迄の経路

（東廻り船）  
山形県の酒田港から北上し、一度青森に入り津軽海峡を渡り、太平洋を下り、各港に寄港し、浦戸港に入り、伊豆の下田迄に至る経路

（上り船・下り船）  
大阪から瀬戸内海を遡り九州西岸沿いを航行、鹿児島へ戻る航路

（定期航路＝雙邊船）  
江戸と大阪を結ぶ航路



### おけさの伝来と北前船

おけさ節は、九州平戸のハイヤ節を起源として、北前船で運ばれ各地に定着したと言われる。佐渡以北でおけさ節と呼ばれる。（「大正寺おけさ祭り」資料より）

基本テーマ	交易の歴史を知る	サブテーマ	歴史街道を行く
-------	----------	-------	---------

## 北前船の寄港地と文物（2 / 2）

### ○北前船による繁栄が残した文化

山形の繁栄は、最上川舟運と北前船による交易抜きには語れません。米沢から酒田まで、県内を巡るように流れる最上川は、古くから舟運に用いられ、流域で生産された織物、紅花、漆などの特産品が川を下っていきました。その物資はさらに北前船によって、京都まで運ばれたのです。逆に京都や北海道からは様々な物資や文化が持ち込まれました。そのため山形は京都色を映した文化が発達しました。当時、商業、回船業、倉庫業などで財をなし、全国にその名をとどろかせた酒田の大富豪・本間家の別荘や本邸、山居倉庫などが残り、当時の栄華を今に伝えています。（・・・後略）

新潟は、戦国時代に越後を統一した武将・上杉謙信の居城が残る上越をはじめ、（・・・中略・・・）また新潟には「越後の豪農」と呼ばれた大地主が 50 以上もあり、全国に名をとどろかせた豪農の見事な屋敷が、当時の繁栄を伝えています。さらに、新潟の繁栄は北前船、佐渡金山の開発、関連する運送において、華々しいものがありました。莫大な財をなした豪商も多く、商業に長けた人々の気質が伺えます。

（東北電力 HP－「東北 7 POWERS」より）

### ○津軽・下北での北前船

北前船の津軽地方における寄港地は、大間越、深浦、鱒ヶ沢、十三湊、権現崎、竜飛崎、蟹田、青森です。いずれの地も越中・能登などの北陸商人、近江商人との関わりが深く、特に青森は越後・越前・近江などから移住民を募って、港町として建設されています。

青森が建設される以前は、羽州街道と松前街道が合流する油川が湊として繁栄していました。弘前藩は、青森港では塩タラ、干鯛（ほしか）、煎海鼠（いりこ）、干鮑などの海産物を、鱒ヶ沢では蔵米を、また蟹田港ではヒバ材を積み出していました。

一方で、下北での寄港地には、大間、佐井、牛滝、脇野沢、川内、大畑、田名部、野辺地があります。この中で特に大間は蝦夷地に最も近い港で、能登や若狭、佐渡などの北陸、淡路出身の回船問屋も多く存在しました。

佐井では、江戸初期から大坂へヒバ材が運ばれるようになり、また、飛騨で木材が入手不可能となった加賀藩が下北に着目するようになりました。しかし宝暦十年（1760）に盛岡藩が下北半島の檜山を直営にしたことにより、山仕事を失った人たちが松前へ移住するようになりました。他に佐井には山丹（黒竜江流域）からサハリン、アイヌを介して松前から本州にもたらされた交易品である、蝦夷錦でも有名です。

他に大畑はヒバの大集積地にして東蝦夷地航路の分岐点、田名部は下北半島一帯の煎海鼠や干鮑の集積地、また野辺地は銅の積み出しを行うなど、大きな役割を果たしていました。



（青森県 HP より）

### ○北前船の復元

小木に住む人々が漁具や農具などを持ち寄り開館した素朴な博物館で、建物は大正 9 年築の旧宿根木小学校校舎を再生。3 万点の収蔵物の大半は漁具や船大工の道具など。北前船が寄港し、佐渡の金銀を積み出した小木らしい内容となっている。併設の千石船展示館では 1858（安政 5）年に宿根木で造船された千石船「白山丸」を実物大に復元し展示している。全長 24m の「白山丸」は、NHK の連続ドラマ『菜の花の沖』のロケにも使われた船。



（HP「旅の窓口」より）

資料；東北電力 HP、青森県 HP、旅の窓口 HP